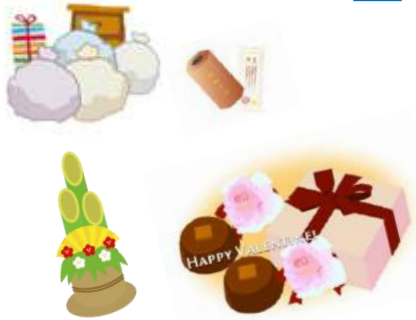


“生き急ぐ”のをやめてみる



今年のゴミは今年のうちに！ と気合を入れて大掃除に取り組んだ年末、宗教について考えることなんてほぼないのに、毎年神社に初詣に行きお御籤を引いて一喜一憂、七草粥を食べて一年の健康を祈るころには、バレンタインデーの飾りに彩られた百貨店にまんまと招き寄せられている……そんな慌ただしい年末年始（だったのは私だけでしょうか）を通り抜けた今、自宅にいる時間には何をしていますか？

もちろん、自宅でも勉強や持ち帰った仕事をしている人も大勢いることと思います。ゲームや映画観賞、手芸や絵画、音楽鑑賞など趣味を持っている人もいるでしょう。でも、「特にこれとってすることは無い」人も大勢いるのではないのでしょうか？ そんな人には是非読書をおすすめしたい！ と、声を大にして言わせてもらいます。こう言うと本を読む習慣のない人は「すぐ眠たくなるから本は読めない」とか「最後まで読むのがめんどくさい」とか「ラストが気になって飛ばし読みする」なんて言いますが、そんな本なら読まなくていいんです。眠たくなるのも、読むのがめんどくさくなるのも、その本に対して興味がないからでしょう。興味を持たない本は、たとえ最後まで読み切っても内容なんてすぐに忘れてしまいます。外に出たくないぐらい寒い休日や、夜がまだ長いこの時期に、ゆっくり、じっくり読み進められる本を見つけてみませんか？

例えば、前回のずいひつで紹介した恩田陸なら『ネクロポリス』上・下巻（楠元所蔵 913.6/255/1,2）はどうでしょう。英国と日本の文化が融合している架空の国で起こる連続殺人、死者が還ってくる祝祭「ヒガン」が行われる中、聖地であったはずのその場所でも新たに事件が…というミステリとホラーの要素を含む長編 SF 小説です。主人公の大学院生と一緒に、異世界に迷い込んだような不安と期待を抱いて読み進められます。もっと重厚なものが好きならば佐々木譲の『警官の血』上・下巻（楠元所蔵 913.6/Sa/1,2）がお薦めです。親子三代にわたって警察官の道を選んだ男たちの生き様と、戦後から二十世紀末までの時代の熱と闇が絡まり合う、片手間には読めない長編小説です。続編『警官の条件』（楠元所蔵 913.6/Sa）もあります。

私はOLだった頃、仕事に追い詰められると長編小説が無性に読みたくなる性質でした。現実のあれやこれやを全部押し退けて、本の中の世界観にどっぷりと浸かり現実逃避をしていたのですが、だからこそどんなに追い詰められても仕事を放り出さずにいられたと思っています。いつも何かを追われ、目的のモノ以外には目もくれないような生活の中に、少し立ち止まって違うものを取り入れてみる時間を持ってみませんか？ これとってすることがないのなら、とりあえず書店で本の背表紙を眺めてみるころからどうぞ。

(図書館風紀委員・M)

